

## IV. 「宇宙文化学」の創造—文化人類学の観点から—

国立大学法人 神戸大学 教授 岡田浩樹

### 1. はじめに

「宇宙文化学」という、耳慣れない研究・教育領域の目的は、人文社会科学の領域がいか  
に宇宙研究にアプローチしうるか、その可能性を探ることにある。言い換えれば、「宇宙文化  
学」という人文社会科学における宇宙研究という新しい分野を「創造」することを表してい  
る。同時に、このタイトルには人文社会学分野から宇宙を「想像」するという暗喩も込めら  
れている。

もちろん、「宇宙」と「文化」という組み合わせに、多くの人が違和感をもつのは自然なこ  
とであろう。一般的なイメージとしては、そもそも「宇宙」とは科学的研究の対象であり、  
人間を越えた世界についての客観的で普遍的な科学的真理を探求するものとされる。これに  
対し、「文化」研究は、人文社会科学の対象であり、人間の世界に限定され、しばしば主観的  
であり、限られた状況の個別性に注目する分野と見なされがちである。

このイメージから言えば、人文社会科学にとって、特殊な場合を除けば、宇宙は関心の外  
にあり、敢えてそれを「文化研究」の対象とすること自体、研究とはほど遠い個人の「趣味」  
に過ぎないということになる。事実、筆者が「宇宙文化学」の下位分野として「宇宙人類学」  
の構想をはじめた時、文化系の同僚の多くは苦笑を持って迎え、あるいは筆者に好意的な文  
化人類学者ですら、困惑を籠めた曖昧な笑みで応じたことは事実である。文化人類学の代表  
的な研究手法として長期間のフィールドワーク（現地調査）があるために、時には、「宇宙飛  
行士になって、宇宙空間でのフィールドワークをするつもりか」とからかわれることもある。  
また理系の同僚は、いささか冷ややかな対応であり、時には「人文社会科学に科学者が期待  
することは何もないですよ」と、にべもない応答すら返ってくることもある。

ただし、今日のように「宇宙」が人文社会科学の関心から脱落し、科学的研究がもっぱら  
対象とするようになったのは、それほど古いことではない。生活を取り巻く「世界」と「宇  
宙」が分離しているという認識は、きわめて近代的な世界観であり、これが人びとの間に広  
く共有されるのは19世紀以降のことであると考えられる。

「宇宙」に対する近代以降の人文社会科学的認識の変化と欠落の問題については、別途、  
検討するに値する問題であるが、ここでは、別の観点から、日本社会における「宇宙」と「文  
化」の問題について述べたい。というのは、21世紀の現代的状況が、「宇宙」と「文化」と  
の関係を私たち、日本社会が考えねばならない時に来ているのであり、「宇宙文化学」という  
新しい研究・教育分野の創造（想像）が要請されているというのが私の考えである。これは  
単に学際的な分野を創出するということの意味しない。現在、文科系、理科系を問わず、多  
くの学問分野それぞれにおいて、要素還元的に細分化され、専門化した研究・教育が重視さ

れているとは、しばしば指摘されることであり、この傾向は特に人文社会系の分野の高等教育においてはなほだしい影響がある<sup>5</sup>。

以下、ここでは21世紀を担う人文社会系の学生にとって、「宇宙文化学」という新しい分野のもつ意味を中心に述べたい。

## 2. 20世紀的「文科系」「理科系」の区分と21世紀のハイブリッド性

近年の日本社会においては、「文化系」と「理科系（科学系）」は、あたかも明確に区別できると見なされる傾向があり、その思考方法やライフスタイル、年取さらには「性差」さらには性格や人格も異なると言ったように一種の「占い」のように語られる場合もある。そして「文系人間」と「理系人間」といった、あたかも違った世界に生き、異なる「人種」「民族」のように描かれる場合も多い。

こうした傾向自体、心理学、あるいは私の専門分野である文化人類学の研究対象となり得るものであり、現在の日本社会のひとつの特徴として議論すべき対象ではないであろうか。もちろん、「文系」分野と「理系」分野では、その対象、視点、あるいは研究へのアプローチが異なっており、大学の専門教育、大学院の過程を通じ、それぞれの専門分野への適性、傾向がある。しかし、日本社会における「文系／理系」の区別は、そのような研究分野の相違、専門分野への適性の違いを越え、過度に強調されていると言えるかもしれない。「文科系」「理科系」の区分は、いわゆる「科学」的思考や方法の基準で区分されているというより、明治期における高等教育の成立の課程というローカルな文脈<sup>6</sup>を反映している。

しかし、このような区分は、20世紀後半からの先端科学の発展がもたらす問題を考える上で大きな障害となりつつあり、深刻な問題をもたらす（あるいはもたらす）可能性がある。それは現在私たちが直面している21世紀の科学的知識と社会・文化の領域のハイブリッドな問題状況がある（異種混交、混合物）。

文化人類学者のラトゥールが述べているように<sup>7</sup>、ある日の朝刊の記事には、難解きわま

<sup>1</sup> この状況は理系の学生においても同様であるかもしれない。で地球惑星物理学者の松井孝典は、東京大学の駒場（教養課程）で文明論や哲学的な視点も盛り込んだ、智の体系の概略を考える講義を試みようとしたが、「対象が理科系の学生のみだったことと、しかも丁寧に説明しないとほとんど理解されないことに途中で気づき」、「理系の学生といえども、哲学や文学に深い関心があった」自分の学生時代の理科系の学生に比べ、「最近の学生は違う」と慨嘆している（松井孝典『松井教授の東大駒場講義録－地球、生命、文明の普遍性を宇宙に探る』集英社新書、2005）。

<sup>2</sup> 旧制高校における「文科」「理科」の専攻区分がそのまま現在の「理系」「文系」の区分に引き継がれている。一方欧米では、「人文科学」「社会科学」「自然科学」に区分され、研究対象と方法と言った学問分野の区分である。

<sup>3</sup> ブルーノ・ラトゥール『科学が作られているとき：人類学的考察』川崎勝・高田紀代志訳、産業図書、1999。

りない科学と世俗的な政治が混在し、結びつけられている。そこには科学、政治、経済、法律、宗教、テクノロジー、フィクションからなる複雑なもつれが描き出され、文化のすべて、自然のすべてがあらたな形—ハイブリッド的な記事として私たちの前に提示される[ラトゥール 200810-12].

今の日本社会においても、例えば東日本大震災、そしてこれに関連した地震予知、原子力発電とエネルギー問題、環境問題、新生殖医療補助技術、IPS 細胞などの再生医療技術、どれをとっても、科学のみに関連する記事でもなく、社会や文化のみに関連する記事でもない。もちろんそれぞれの専門家たちは、細分化された専門分野の数だけ切り分けた知識や情報を提供しているとしても、その出来事全体が何なのか、理解することは困難である。科学的知識の領域と社会的、文化的領域、あるいは普遍的問題と個別の問題、グローバルな問題とローカルな問題を混同することが問題なのでない。

現代私たちが直面する様々な課題はむしろ科学的知識と社会・文化のもつれがもたらす混乱によるものであり、もはや、この両者を切り離して、科学的知識の領域も社会・文化の領域、普遍的問題と個別の問題、グローバルな問題とローカルな問題も、互いに無関係に存在することができないことが 21 世紀の現代的状況である。同様のことは、宇宙に関する科学的探求や宇宙開発の諸問題についても言い得ることであろう。もはや科学的技術を見捨て「宇宙」や「宇宙開発」について語ることはあり得ないし、社会・文化の領域を見捨て「宇宙」研究や「宇宙開発」が成立し得なくなっている。

したがって、「宇宙文化学」の目的とは、理科系と文科系の単なる学際的研究あるいは教育を意味するのではなく、「宇宙」という 21 世紀の科学—社会—文化というハイブリッドな現象に対し、それぞれの分野を超え、いかにアプローチするかを模索することにある。とはいえ、私たちは既存の学問分野に規定されるし、またそこに基盤を置かざるを得ないというジレンマがある。

文化人類学を例に挙げるならば、旧来の文化人類学の視点から「宇宙」・「宇宙開発」を捉える方向がある。一方で、「宇宙」「宇宙開発」というサイドラインをひくことで、文化人類学において最終的な問い「文化とはなにか」についての答えに新しい展開を期待するものである。他の人文・社会科学分野においても同様のサイドラインを引き、これを総合することで「人間とは何か」という問いへの考察を深めることができるであろう。

理科系分野においては、社会・文化という「不純物」を視野に入れることで、すべての学問分野にとって究極の問いに答える一歩になることを期待している。その究極の問いとは、天文学・宇宙科学の究極の問いとして、2007 年に日本を含む宇宙機関が発表した枠組文書「グローバル探査戦略 (global Exploration Strategy; GES) 19」の三つの問い「Where did we come from?」、「What is our place in the universe?」、「What is our destiny?」と重なり合う、ポール・ゴーギャンの有名な作品のタイトル「我々はどこから来たのか?」「我々は何者か?」、

「我々はどこへ行くのか？」に答えることになると思われる<sup>8</sup>。

ただし、これは多くの分野のコラボレーションが必要であり、短期的に成果が出ない、大きな課題であり、さしあたりは直近の問題に「宇宙文化学」の取り扱う問題を限定することは現実的であろう。そこで、次のように先の問いを限定したい。21世紀の宇宙科学—社会—文化のハイブリッドな状況に置かれた私たちは、「どこから来たのか?」、「何者であるのか?」、「そしてどこへ行くのか?」、これらの問題をまずは「宇宙をフィールドとして」人文社会科学分野において考えることに置くことにしたい。

### 3. 「宇宙文化学」という新しいフィールド

人類が宇宙に進出してから、すでに半世紀が経過した。1969年の月面への着陸、無人衛星、探査機による科学的調査など、宇宙は先端科学技術の集積であり、革新を促す「科学的」フィールドであった。この50年近くの間、宇宙に関する科学的・技術的研究は急速に進歩する一方、宇宙に関する人文・社会科学的な立場からの研究はほとんどなされていないのが実態である。

宇宙に関する人文社会科学的研究は、国際高等研究所がおこなった木下富雄編の報告書(2009)<sup>9</sup>を嚆矢とするものの、JAXAのレポート(2012)<sup>10</sup>を除き、その後の展開はほとんど見られない。海外では米国においてNASA主導でおこなわれた研究レポートがあるものの、テクニカルな側面に重点がある。また欧州では仏国家高等研究所のJ. Arnouldが「宇宙倫理学」を提唱しているほか、領有権をめぐる国際法上の研究が盛んである。人文社会科学系研究者が加わった先駆的研究としては、Codignola-Bo, Luca; Schrogl, Kai-Uwe 編の「Humans in Outer Space - Interdisciplinary Odysseys」(2009)<sup>11</sup>、Benapola編の学際的研究『Lunar Settlement』(2010)<sup>12</sup>がある。ただし、特定テーマの議論に終始しており、人文社会科学の各分野における組織的研究アプローチの検討、あるいは共同研究体制は十分に整っているとは言えない。

人文社会科学からのアプローチと言っても、それぞれの分野で、様々な研究手法、多様なトピックが想定される。例えば、コミュニケーション研究からは、コミュニケーションの実験室として宇宙を捉え、コミュニケーション研究、ひいては人文社会科学研究分野における、宇宙というフィールドの重要性や新たな研究の可能性を探るアプローチがある。あるいは、

4 磯部洋明 「Ⅲ. 宇宙物理学からのアプローチ—人類の宇宙進出の意義に関する検討」『宇宙時代の人間・社会・文化—新たな宇宙時代に向けた人文科学および社会科学からのアプローチ JAXA-RR-11-006』2012, pp.51.

5 木下富雄編『宇宙問題への人文社会科学からのアプローチ (高等研報告書, 0804)』, 国際高等研究所, 宇宙航空研究開発機構, 2009

6 宇宙航空研究開発機構, 『宇宙時代の人間・社会・文化—新たな宇宙時代に向けた人文科学および社会科学からのアプローチ JAXA-RR-11-006』2012

7 Codignola-Bo, Luca; Schrogl, Kai-Uwe (Eds.), 2009 Humans in Outer Space - Interdisciplinary Odysseys, Springer.

8 Haym Benaroya (eds.)2010 *Lunar Settlements*, CRC Press.

宇宙飛行士と地上との、地上での宇宙空間を介した「宇宙とのコミュニケーション」を想定することで、従来のコミュニケーション研究に新しい展開を目指すアプローチも考えられる。さらには、コミュニケーションに着目し、文化や社会の再編・創造の場として、宇宙空間および宇宙研究をコミュニケーションから捉え直すアプローチも考え得る。

コミュニケーション研究だけではない。宇宙に関連した「科学—社会—文化のハイブリッド性」は、人文社会科学が取り組まざるを得ない現代的状況に密接に関わっている。すなわち、衛星通信技術を利用した携帯電話、GPS、衛星テレビ放送など、情報通信技術の飛躍的な技術革新とそれによるコミュニケーションの拡大は、国民国家という単位を超えた文化・社会的変容をもたらしつつある。

宇宙研究・宇宙開発は、こうした社会・経済・文化のグローバル化を支え、これを促進している。グローバル化によって、人々の生活世界は拡大するとともに、拡大した生活世界がさらなるグローバル化を要請していると言えよう。しかしながら、グローバル化が文化や社会の均一化をもたらすわけでは必ずしもない。むしろ文化間の相違や軋轢が発生し、顕在化することにも目を向ける必要がある。宇宙空間を文化や社会の再編・創造の場としても捉えることができるというのは、こうした視点からである。その意味で、人類の宇宙進出とそれに伴う問題は、科学的・技術的課題に限定されるものではなく、人文社会科学の分野においても、新しく挑戦的な問題領域でもある。

#### 4. 宇宙人類学のアプローチ

ここで、筆者の専門分野である文化人類学から、「宇宙」に対するアプローチ、「宇宙人類学」について若干の考察を加えたい。

人類学は実証的なフィールドワークによって異文化を理解しようとするとともに、「私たちがとりまく世界の秩序と、私たちが生まれた社会の構造を解き明かし、その存在理由を示す」（レヴィ＝ストロース）という世界観および文化・文明の理解を行ってきた。しかし、後者は近代化およびグローバル化の進展により、現在の人類学者の関心から脱落しつつあると言えよう。「宇宙」というフィールドを設定することで、現代の科学・技術の進展を踏まえた宇宙という「外部社会」を想定することで、人類学が備えていた文化・文明論的思考を復活させるという学問分野に於ける意義があるであろう。

宇宙というフィールドは、実際の調査地でのフィールドワークを主要な研究手法とする人類学においては無縁のトピックと考えられてきた。しかし、宇宙への文化人類学からのアプローチからは、宇宙開発とグローバル化の問題、技術の進展を支える社会的文化的基盤、コミュニケーションや身体の新たな可能性といった従来の研究の延長上のトピックが想定できる。加えて、人類学が目指してきた文化・文明の議論（例えばユートピア論など）あるいは世界観などについても新しい視点と発想をもたらす可能性がある。そこで、「宇宙」をフィールドとし、これについてのアプローチに「宇宙人類学」と命名した。この「宇宙人類学」は、単なる思考実験に留まらず、従来の人類学の知見や視点を宇宙という現代的・将来的な状況



に適用し、検討するという実践性をも備えている。

近年、宇宙に関連した諸問題には今日の人文社会諸科学が取り扱うべき社会的・文化的問題が明確に顕在化している。すでに宇宙ステーションにおいては、そこで「生活」を営む各種の実験がおこなわれつつある。

例えば、宇宙ミッションを実施する宇宙飛行士は今や他国籍の混成チームで有り、そこでは身体性、コミュニケーション、異文化理解、多文化主義の問題、宇宙コロニーの構想における移民の問題など、ある種の「多文化状況」が存在する。それゆえに人類学的知見の応用可能性がある。

また宇宙開発と現実の社会との関係についても、実際的なテーマが現れている。民間の宇宙旅行、宇宙エレベーター計画など民間の宇宙旅行も現実のものとなりつつあり、これに対し観光人類学のアプローチも可能である。宇宙開発は巨額な費用を必要とするため、宇宙空間の領有権の問題、管轄権の問題、資源問題、廃棄物の問題、宇宙先進国と後発国の格差問題など、宇宙のガバナンスといった政治的・経済的問題がある。また、宇宙開発に関わる巨額な開発費の負担や有人飛行における人命の安全担保の問題などは、政治経済的要因だけでなく、個々の社会の社会観、世界観、未来の社会・文化デザインの課題でもある。

むろんこれらのトピックは、文化人類学のみならず、隣接する他分野、社会学、心理学、さらには社会科学、さらに自然科学と共同して探求すべき対象である。したがって、文化人類学のアプローチから「宇宙」を対象化するというより、「宇宙」というハイブリッドな問題に取り組み、文化人類学自体が取り扱ってきたテーマを対象化すると表現する方が適切である。

例えば、現代の人類学の重要なテーマであるグローバル化の人類学的研究に新しい視点や着想をもたらす可能性がある。つまり、宇宙開発がもたらした技術革新（GPS、携帯電話、ナビゲーションシステム）により、グローバルネットワークが構築されてきたのであるが、このネットワークの構築はコミュニケーションの様式、社会関係のあり方、さらには国家そのものを揺るがす事態をもたらし、同時に社会的・文化的閉塞感を生み出している。

一方で、均一なネットワークの拡張はむしろ多様なシステムを創出（V. マッキーナ）する可能性もあり、宇宙をグローバル化の延長上として捉える視点により、グローバル化について新しい知見をもたらさうであろう。

現段階では、「宇宙人類学」に主に3つのアプローチが想定しうる。

(1) グローバル化という現在進行中の歴史現象の延長の上に宇宙開発の問題をとらえ、現在の宇宙開発を支える世界観を「近代」や「ポスト近代」の問題と関係づけながら、「近代」を超える可能性の探求。

(2) 人類学がこれまで培ってきた方法論や概念装置が、「宇宙」という新たな領域において有効性を発揮しうるかどうかの検討。

(3) 宇宙開発によって人類の多様性がいかに進展しうるかの可能性についての検証。

## 5. おわりに 宇宙人類学の実践に向けて

2012年に、文化人類学者を中心として、他分野の研究者30名と「宇宙人類学研究会」を構成した。この研究会は日本文化人類学会の重点研究（日本文化人類学会研究懇談会）のひとつとして採択され、本格的に研究を開始した。その研究会の中核メンバーは、「宇宙開発に関する文化人類学的アプローチの検討」というテーマで、平成25年度科学研究費補助金を得て、「宇宙人類学」の可能性と理論的枠組を検討している。この「宇宙人類学研究会」は、文化人類学における関連分野（科学人類学や認識人類学）の研究グループ、および他の研究分野とも連携しており、神戸大学国際文化学研究所異文化研究・交流センターは、研究会活動、連携研究のHUB的な役割を果たしている。

神戸大学で実施された「宇宙文化学」の講義には、「宇宙人類学」の研究成果の一端を反映させている。今後、宇宙に関する人文社会科学からのアプローチが深化すると同時に、21世紀を担う大学生、特に人文社会科学分野専攻の学生に対し、どのように、「宇宙」をめぐるハイブリッドな状況を読み解く新しい能力を涵養するかが重要になるであろう。「文科系」と「理科系」が分離していた20世紀の教養の一部ではなく、21世紀に生きる学生に必要な「新しい教養」の重要なテーマのひとつとして「宇宙」をいかに取り扱うか—その模索のささやかな一歩を記したばかりである。

## 参考文献

- 松井孝典（2005）『松井教授の東大駒場講義録—地球、生命、文明の普遍性を宇宙に探る』集英社新書。
- ブルーノ・ラトゥール（1999）『科学が作られているとき：人類学的考察』川崎勝・高田紀代志訳、産業図書。
- 磯部洋明（2012）「宇宙物理学からのアプローチ—人類の宇宙進出の意義に関する検討」『宇宙時代の人間・社会・文化—新たな宇宙時代に向けた人文科学および社会科学からのアプローチ』pp. 51.
- 木下富雄編（2009）『宇宙問題への人文社会科学からのアプローチ』、国際高等研究所+宇宙航空研究所。
- 宇宙航空開発機構（2012）『宇宙時代の人間・社会・文化—新たな宇宙時代に向けた人文科学および社会科学からのアプローチ』宇宙航空開発機構
- Codignola-Bo, Luca; Schrogl, Kai-Uwe (Eds.) (2009) *Humans in Outer Space - Interdisciplinary Odysseys*, Springer. Haym Benaroya (eds.) 2010 *Lunar Settlements*, CRC Press.